

(4)

氏名(生年月日) 斎藤 秀子
サイ トウ ヒデ コ

本 籍
 学位の種類 医学博士
 学位授与番号 甲第13号
 学位授与の日付 昭和38年3月30日
 学位授与の要件 学位規則第5条第1項該当(医学研究科精神医学専攻, 博士課程修了者)
 学位論文題目 精神薄弱児に見られる心情変移の障害について
 論文審査委員 (主査)教授 千谷七郎
 (副査)教授 松本武四郎, 教授 磯田仙三郎

論文内容の要旨

目 的

精神薄弱 (Schwachsinn) なる呼称は主として先天性
 或は幼時期発生の知能の発達障害の側面に関して命名さ
 れたものであったので、従来の研究の関心はこの側面に
 向けられたものが多かった。著者は異常体験反応或は心
 因反応と呼ばれて来たものが、軽症精神薄弱児に出現する
 ことが多いのに顧みて、これらの異常反応を通して精神薄
 児の人格構造の不安定性を明らかにし、あわせて異常反
 応そのものの出現と推移様式を新たな観点から追跡考察
 することを目的とした。

方法と材料

異常反応について従来行なわれて来た記載的方法によ
 る類型学的分類では、病像相互の構造的関連や推移の特
 殊性について明らかでない部分が多く残されている。近
 時 K. Kollé は異常反応を一括して心情的危機として、
 表現学的基礎からの解明を示唆しているが、まだ十分具
 体的な報告を見ない、著者は L. Klages の表現学の基礎
 理論に基づいて、軽症精神薄弱児に発現した2例の恐怖一驚
 愕反応の出現、消褪の推移を追跡した。

所 見

精神薄弱児も年令に伴なって知能も緩慢ながら発達
 し、それによつて社会適応性能も僅かながら進展する。
 しかし人格年令、あるいは社会的年令が正常児の6~7
 才頃に該当する時期にはようやく因果関係に関心を抱き
 始めると共に、生命的危惧心、不安なども、それ迄と異
 なつた様相で出現するので、この時期の生死に関する些
 細な印象切つ掛けが、こなしきれないままに、いわゆる
 異常反応を起し易い。

15才10カ月(知能指数66, 知能年令10才, ただし人格
 年令は6~7才ぐらい)に生じた恐怖一驚愕反応は、従
 来の記述式に従えば先ず驚愕麻痺の朦朧状態が生じ、や
 がて困惑像に移行して行つたものである。後者に移行す
 るにつれて Echolalie, Vorbeireden その他道化症状が
 出現して注目を惹いた。朦朧状態は、印象過程における
 観得の分別相 (Entfremdungsphase des Schauens)
 の生じないままに周囲の出来事にただ自動反響的に、無
 撰擇に受容して、めまぐるしく情態転移する感情変調
 (Umstimmung) のみを示して、変移 (Wandlung) が
 完結しない姿であつた。困惑像にやがて分別相が回復し
 始めようとするが、完全には回復を見ない時期の状態と
 見られた。即ち, Echolalie は無意識の模倣欲動の現わ
 れとして分別の方向への前進と解せられ、それが成功し
 ない時に, Vorbeireden を見た。その事から Vorbeire-
 den もまた、道化症群と同じく、困惑者に見られる或る
 種の「はぐらかし」に基づくことを見た。其の他困惑者
 の不安定についても考察した。

他の一例は12才3カ月(知能指数62.6, 知能年令7才8
 カ月, 人格年令は知能年令相応と認められる)の女子の
 軽症精神薄弱に生じた、やはり恐怖一驚愕反応である。
 これは印象の切つ掛けを何かの折に思い浮べると、それ
 に「巻き込まれて」不安恐怖の情態に陥るが、間もなく
 「心の平静」を取戻すという発作襲来の形であつた。即
 ち、感情変調は生じているが、感情転移のままではなく
 て、分別相は生じて変移は一応完結する。併し印象切つ
 掛けそのものに対する領取過程が十分でないために再三
 巻き込まれを生じるといふ、融即 (Verschmelung) と

分別との両相が激しく交替的に生じる変移過程と見られた。その後は発作の様相が焦燥感の発作的襲来の形に変つて、心の平静回復を予期する緊張と、その結果へのあがきとの頻繁な交替を見た。

同様に恐怖—驚愕反応と一括される2例でありながら、表現学的基礎理論を適用することによつて、両者の同異を従来に比してかなり明らかにすることが出来たと同時に、異常反応そのものに対する理解を深め得たと思

う。

即ち、同じ感情変調でありながら、分別相の行なわれている場合と、然らざる場合との相違が症状面に大きく反映したことである。

併し共通面より見るとき、両例共に印象切つ掛けに対する撰擇受容性能の不安定性に基づいており、この不安定が精薄児のもつ人格的不安定を物語ることが想定される。

論文審査の結果の要旨

精神薄弱における従来の研究関心は主として知能的側面に向けられて来た。著者は異常体験反応の出現が軽症精薄児に多い事実を顧みて、これら異常反応を通して精薄児の人格構造の不安定性を明らかにし、あわせて異常反応そのものの形態様式に対して表現学的解明を試みた。

本報告は、従来十分に臨床領域に取り上げられるに至つていなかった L.Klages の表現学的基礎理論に基づいて、軽症精薄児に発現した恐怖驚愕反応の2例につき、その病像の出現、消褪の推移を詳しく追跡した。

その結果、1つにはもうろう、ガンゼル症候群などを示す驚愕麻痺が、印象過程における観得の分別相の生じない状態での情態転移性白日夢であり、やがて分別相の生じ始める時期の困惑像として Echolalie, Vorbeireden, 道化症状群が附帯することを見た。また、驚愕麻痺、もうろうにまで至らなかつた恐怖—驚愕反応は、分別相は生じていながら、領取道程が続いて生じないために印象とのつながりが続いている感情変調で、融即と分別の両相が頻繁に交替する変移様式であることを明らかにした。そして共に、印象に対する撰擇的受容性能の不安定性に基づき、この不安定性が精薄児のもつ人格構造の不安定性を物語るものであることが想定された。

すなわち、精薄児に出現しやすい異常体験反応に表現学的解明を与えたものであつて、医学に寄与するものと認める。

主論文公表誌

精神薄弱児に見られる心情変移の障害について。
東京女子医科大学雑誌 第32巻 第10号 410—421頁
(昭和37年10月)

参考論文公表誌

脳内細動脈狭窄による多発性脳軟化の1例。(共著)
精神医学 5巻 (2) (昭和38年2月)